四国・水こぼれ話
Water Information Saloon Shikoku
談話室 Vol 100

次代に残したい第十堰伝説

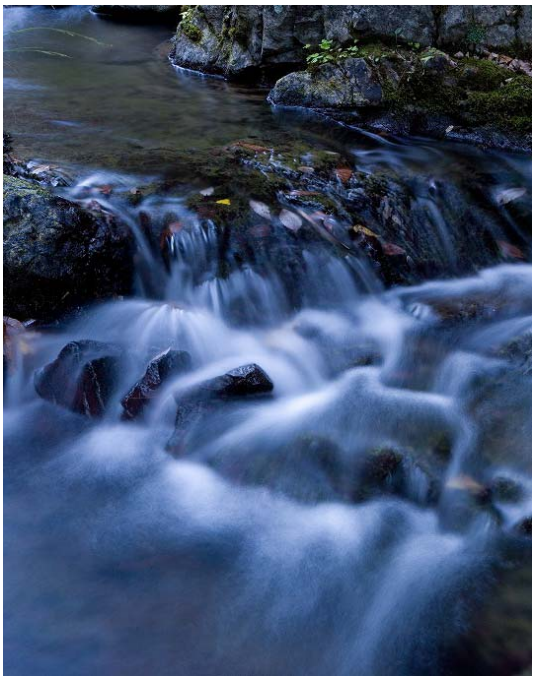
徳島県　上板町長
松尾（まつお）　國玄（くにはる）

上板町は、阿讃山脈を背に南は清流「吉野川」に面し、水と緑豊かな自然環境の中にあり、この美しく豊かな自然は、町民の生活に潤いと安らぎを与えています。藩政期の宝暦 2 年、本流での農業用水を確保するために築造された「第十の堰」は、今も吉野川北岸一体の水田を潤し、また、優れた自然環境が残された憩いの場として人々に親しまれています。その吉野川の第十堰について言い伝えられていることを述べてみたいと思います。

「吉野川の流れは、今から約 300 年前には、第十堰付近から下流は、別宮（べっく）川という名の川幅約 80mほどの運河でした。その当時の本流は、今の第十堰から、今切川と二つに分かれて海に注いでいる旧吉野川だったのです。それを三代藩主の蜂須賀忠英が、寛永 2 年（1625 年）に、徳島城下と山分地方の水運をはかるために、名西郡第十村付近から吉野川の水を引いて運河を造ったところが、出水のたびに岸を崩していって、いつの間にか別宮川が本流になってしまいました。こうなると旧本流や今切川の水で灌漑している村々の農民は、全く困ってしまいました。水田は毎年のように干害に悩まされ、そのうえ海の水が逆流して収穫はなく、年貢米も納められなくなって、夜逃げする農民も多くなってしまうという始末だったようです。

こうして宝暦 2 年（1752 年）に、下流の大松村の庄屋丹右衛門をはじめ、39 か村の庄屋が中心になって、藩に願い出て第十村で水をせき止めて、水を本流へ流す大工事にとりかかったのです。しかし激しい水の勢いで、工事は始めから困難をきわめました。それでも村人たちはひるまず、私財と労力を費やして水をせき止めることに成功したのでした。ついに人々の努力が自然の力を征服したのです。その時の村人たちの喜びは、とても今の私たちには想像もできないものであったと想像されます。

堰は、南岸の名西郡石井町藍畑から、北岸の板野郡上板町まで築かれ、ゴーゴーと音を立てて滝のように流れ、白布を広げたような水しぶきは、ほんとうに壮観であり、両岸の村々の平和と豊作とを祝福しているかのようでもありました。」



泉谷渓谷の清らかな流れ
讃岐山脈に源を発する泉谷川は、美しい渓谷をなし人々の暮らしと心を潤しています

吉野川を見守っている第十樋門
第十堰の下流部の新川は昭和 3 年に正式に「吉野川」と命名されました